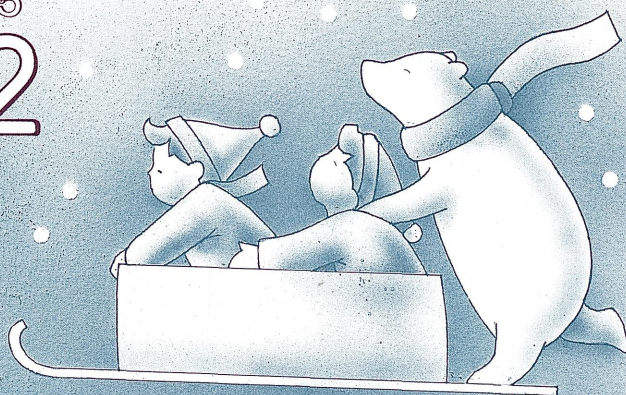


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995

12



Junji '95

第94巻 第12号 日本幼稚園協会

ワーキングウーマンのための 情報コレクションシリーズ

フレーベル館／編



⑨骨董・文化財に強くなる

焼きものからお寺・仏像・庭園まで

日本の伝統文化の奥深さ、素晴らしさを見直し、暮らしに取り入れて楽しむことを提案。骨董の選び方、仏像の見方、菩薩と如来の違い、五重塔の意味…等々、古き良きものへの知識を深め、クラシックな“旅”や“買い物”を数倍楽しくするハンドブック。



⑩OLが気になる〇〇病

もっと知りたいからだのこと

病院に行くほどでもないけれど何となく不調…。ストレス、便秘、貧血、アトピー、不安神経症、花粉症、生理不順等々、OLが気になる症状の多くは、過労やストレス、生活のアンバランスが原因。健康管理の基本から、気になる病気の予防と対策までをわかりやすく解説。

既刊本

①ひとり暮らしのノウハウ

安全管理から
冷蔵庫の必需品まで

②あなたを護る法律たち

セクハラ、金銭トラブル…
知っていれば100倍有利！

③OLのための冠婚葬祭ブック

恥をかかない
マナーのポイント

④かしこいOLの仕事術

オフィスで輝く態度、話し方、
文書マナーを身につけよう！

⑤徹底研究！ あなたの保険

どんな保険がいつ、どんなふう
役に立つのか

⑥歌舞伎・オペラ入門

チケットの買い方から
主要作品ガイドまで

⑦脱OL講座

OL卒業！
27歳からのキャリア・アップ

⑧99のスリム術

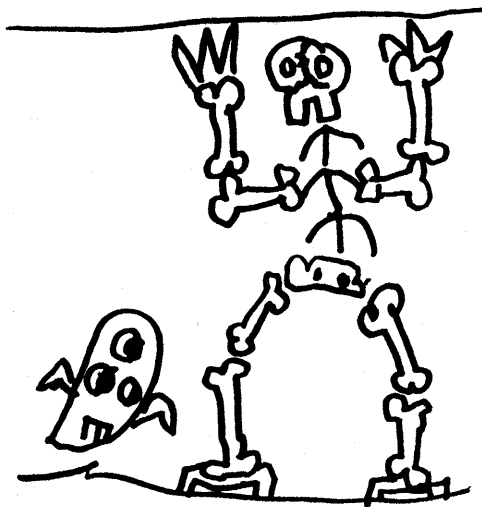
必ず見つかる
自分に合ったダイエット

B6 変型判・172～184頁・定価各980円(本体951円)

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第94巻 第12号



幼児の教育 目次

——第九十四卷 第十二号——

© 1995
日本幼稚園協会

〈巻頭言〉 “保育を楽しむ” ことを……………高杉 自子…(4)

OME P 世界大会を終えて……………津守 真…(7)

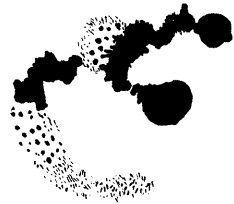
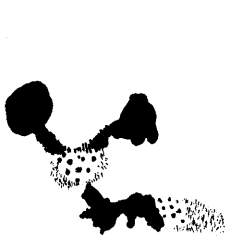
保育の日常を問う — 環境としての自然とどう向きあうか！…新井 孝昭…(13)

保育を裏付けるものを考える(2)

— 米国の実践例から学ぶこと！……………森 眞理…(20)

震災後の子どもたち(3) 『震度1、震度2、震度3…』……………南 佑子…(28)

トボスにおける発達 第五回 声と言葉……………無藤 隆…(34)



子どもたちへのまなざし(10)

ノンヴァーバルコミュニケーション……………松井 とし…(42)

園長室の窓から(5) 保育環境について考える(4) 園舎……………原口 純子…(44)

引き際を上手に……………吉岡 晶子…(52)

ある日の育児日記から(60)……………佐藤 和代…(56)

『十里霧中』 ―息子たちのイギリス公立校体験記(2)―……………豊田 一秀…(57)

第九十四巻総目録……………(61)

表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・彌永たたえ(小さな解放)

編集委員・田代 和美

梶田 正子・伊集院理子

編集部・仲 明子・大沢 啓子



“保育を楽しむ”ことを

高杉 自子



保育者は、子どもの発達に向きあう仕事である。一人一人のかけがえない生命体と生活を共にし、必死になって自らの力をふりしぼって生きようとする子どもたちの発達に参加できる幸せを思うと胸がわくわくする。保育は正解があるわけではない。理想の型に当てはめるのではない。人間と人間のお互いの関係の中で生み出され、つくり出していく生成の営みである。個々の子どもが自分と身の回りの見方と関わり方を変え、自己世界を拡げ、他者と交わりつつ新たな世界を創造していく営みが保育である。子どもたちとつくり

出す日々は、いつも新鮮で、いきいきしく、多様で複雑、意外性に富んでいる。即ちそれが園生活である。心を弾ませずにはいられない。

それにしても、子どもも先生も毎日待ちわびるような楽しい保育は展開できないものか。

「望ましい保育とか良い保育、マニュアルや御墨付を求める」願望からまず抜け出すことである。自分を締めつけている枠や鎖を探し解き放すことから始めることではないか。

子どもは新しがりやで、おもしろいことが大好きで、楽しさを見つけた天才である。私たちの身の回り、特に自然界は楽しさの宝庫である。人間、社会、文化、一つ一つに意味があり、出会い一つでも関わり方をいいねいに心をこめてつきあえば、「楽しさ」はいくらでもみつげることができる。

考えてみると、戦前、まして戦中はすべてが乏しく暗く、言い知れない不安につつまれていた。「欲しがりません勝つまでは……」と自他共に言いふくめられて耐えた生活だった。しかし、それでも、どんなことの中にも、自分なりに小さな楽しみを見つげること生きぬいてきたように思う。それが「習性なづとなって」いついかなる時も楽しみを見つげようとする自分があることに気づく。だから喜びもうれしさも幸せも、全て自らの心の中に見つけ、味わうことによって楽しさに変えることができると私は思っている。

ことは戦後五十年で明け暮れた。正月明けから想像を絶する阪神大震災という天災に見舞われ、その後、宗教という名を借りたテロ集団は日本列島を震撼させた忌しい事件を

次々と起こした。戦後、営々と築いてきた日本の誇り、平和、自由、安全は脆くも崩され、得体の知れない不安、生命の危険に脅かされた。

いじめの構造や登校拒否増加と共にこのオウム真理教の罪禍は戦後の教育の在り方の間い直しをつきつけたように思う。

保育界は戦後の焼跡困窮の中から愛情の発露として新たな保育創造の営みを築いてきたように思う。幼稚園が学校教育法に、保育所が児童福祉法に位置づき、保育要領（保育の手引き）が文部省より刊行され、幼稚園、保育所、家庭に配布された。幼児の生活が浮き彫りにされ子どもの自発性、生活性を尊重した保育が述べられ、保育内容は楽しい経験として示された。

その後、法制上、条件整備上、保育理論、保育方法、保育研究、保育者の研修体制や待遇等、次々と改善改革を重ね、戦争直後には想像もつかない程、整備拡充発展してきた。

しかしながら、保育の場から、子どもの生活の活力となる楽しさは消えつつあることに危機感を感じるのは筆者のみであろうか。幼児一人一人が未来に夢と希望をもち、人間と人間のすむ環境を愛し、自立と共生と楽しむ保育の創造こそがこれからの課題であろう。

（昭和女子大学）



OMEP世界大会を終えて

津守 真

四年間にわたって準備してきたOMEP世界大会が終わった。

海外四十数か国から約三百人、日本国内から約千六百人の参加者があり、盛況であった。

その準備には、世界大会運営委員会、実行委員会の五十人を超える方々が長期にわたりあたられた。当日は数え切れないほど多くのボランティア、アルバイトの方々がこの世界大会のために行き届いた世話をして下さった。海外の人達も、カナダにある



OMEPP世界事務局、英国のOMEPPジャーナル編集部をはじめ、多くの方々が労力を提供された。

日本国内の幼稚園、保育園の諸団体からは並々ならぬご協力を頂き、また、関係行政諸機関の援助、後援を頂いて、この世界大会は可能になった。

今回の世界大会は、最初から最後まで専任職員はひとりもなく、ほとんどボランティアによって運営されたことは大きな特色であった。子どもの仕事を通じて世界平和に寄与したいという多くの人の心の願いがそれを可能にしたのだと思う。

七月二十八日に世界OMEPP常任理事会がはじまり、世界大会の前後に世界理事会、常任理事会が行なわれたので、全部で九日間に及ぶ長期の会合であった。世界大会の始まる前にOMEPPデーがあり、ジンバブエのフェイ・チュン女史の講演、ユーゴのベシク女史のスライドと講演があり、横浜市民と地域の養成校の学生達が集まった。八月一日夕六時から、秋篠宮妃殿下のご臨席のもと、赤い靴記念事業団合唱団の子ども達による柴田南雄作曲「北越戯譜」の演奏から開会式が始まった。八月二日から、講演、シンポジウム、分科会、「世界の保育と施策をみる」VTRショー、「世界の子どもの祭り」と祝いの展示、「インターナショナル・バザール及びOMEPPグッズセール」など、十教室で平行してプログラムが行われた。また、保育園、幼稚



園諸施設の見学も行われ、それぞれの施設でおもてなしを頂いた。八月二日夜のアジア・太平洋子ども歳時記は、韓国の華やかな舞踊からはじまり、アジア太平洋諸国の人々の歌や踊り、そして日本の岩手民謡で終わった。八月三日夜は、氷川丸船上でインターナショナルの夕べが行われ、アジア太平洋地域、アフリカ、南米、北米、ヨーロッパと世界中の国々の人々が賑やかに踊り、歌った。そして八月四日にOMEPP世界総会の際にはOMEPP日本委員会名誉会長莊司雅子先生に、世界OMEPP名誉会員の賞状が贈られた。ひきつづき閉会式では、次回、北欧五か国の協力によって、デンマーク、コペンハーゲンで開催される第二十二回OMEPP世界大会にOMEPPの旗を引き継ぎ、名残りを惜しみつつ、散会した。多くの人が、開会式の音楽をいつまでも幻のように思い出すと語り、また、世界の保育者が一緒に数日を過ごした事実に感銘をうけたと語った。

世界大会の周辺プログラムには、「横浜美術館」における「世界・子ども美術展」、阪神の大地震の子どもの絵画展、「人形の家」における「人形・おもちゃが語る日本人の子育て」展が行われていた。また、世界大会後、OMEPP会員の好意により国内約十地方でフェローシッププログラムが計画されて、特に海外の参加希望者の二泊旅行が行われた。また、横浜市内の幼稚園、保育園のご好意により、会期中、いくつかの園のホールでの宿泊がなされた。お世話にあたられた方々はその準備に容易ならぬ



ご苦労であったが、いずれも海外からの参加者にとっては、普通には得難い体験で、大いに喜ばれた。

これだけ多くの人々が集まった多様なプログラムの中では、参加者によってそれぞれ印象も感想も異なるであろう。私は準備の最初から責任をもって参画した主催者であり、参加者の方々にはさぞかし不便や不満足を残したことだろうと思い、申し訳ないことがいろいろである。

この四年間、私は世界大会のことを考えない日はなかったが、その日は否応無しに來てしまった。そして世界理事会前夜まで私共はアジア、ロシアなどの参加者のためのビザの事務に追われていた。最後の瞬間まで、ビザがとれるかどうか分からず、どの国の人が参加できるかも分からない状況だった。

いま、世界大会を終えて私なりに考えたことを記したい。

開会式から閉会式に至る間に、次第に私自身に明瞭になってきたことがある。それは、子どもの幸せと世界の平和とは切り離せないということである。今年には戦後五十年の記念の年であり、日本人にとっては平和というテーマは常に心にある。実際に世界大会が進行して多くの人が子どものことを語り、自分もまた話すうちに、子どもが



幸せでないところに平和はないという考えは確信に近くなった。海外の参加者のバックには荘司雅子著『親と子のための平和教育』（財団法人広島平和文化センター）の英訳が入れてあったが、ヨーロッパから来られた一人の男性は、ホテルで夜これを読んで涙がとまらなかったと私に話された。また、カナダのひとりの女性は、子どもの笑顔のあるところには平和があることがよく分かったと言って横浜のホテルを去って行かれた。こう考えると私共の日々の保育そのものが平和をつくる営みであることが自覚される。

世界大会最終日、デンマーク委員会によって企画された「子どもにとって二十世紀とは？」というシンポジウムで私は話をする機会を与えられた。とくに「日本のような国で子どもの権利は何を意味するか」という話題が私に与えられていた。私は今世紀前半の倉橋惣三の遊び中心の保育の歴史を語り、二十世紀後半、高度成長期以来、日本の社会と教育に浸透している競争原理の考え方、その結果としてのいじめや子どもが自殺など社会病理現象の増加について述べた。そして、現在の保育の課題は、子どもが自分で選択する保育、子どもの独自の世界を尊重する保育をつくることであると結論した。

二十世紀の初め、エレン・ケイは、『児童の世紀』という書物を著し、忽ち数か国



語に翻訳された。私はこの機会にこの書物を読み直した。エレン・ケイは子どもの中に「未来への意志」を育てることと、「子どもに固有の世界」を尊重することとを教育の根本と考えた。幼いときから、自分で選択して遊ぶことを経験した子どもは、未来に自分が何事かをなし得るとの希望と意志をもつだろう。また、子どもが生きていく独自の世界を尊重することは創造的な社会のもとであり、それを発見することは教育の出発点であり、また保育者の楽しみである。このことは今世紀の初めから現代に至るまで子どもの教育の課題でありつづけている。おそらく次の世紀も同様であろう。

いま身近に当面している保育の課題は、世紀の課題だったし、広く世界の保育の課題でもあることを、私は今回の世界大会によって再認識した。

OME P世界大会の開催にあたっては、日本の幼稚園、保育園、保育者養成校、その他保育関係者の方々に、物心両面にわたり、並々ならぬご援助を頂いた。また、OME P世界本部の方々には、長期にわたり親身な協力を頂いた。どの一人の方もその協力なしには世界大会の開催はできなかったろう。感謝あるのみである。そして、日本及び外国からの多くの参加者の子どもへの熱い思いがなかったなら、この世界大会はなかったと思う。

(愛育養護学校)

保育の日常を問う

——環境としての自然とどう向きあうか——
(付)

新井 孝昭

はじめに

日本保育学会第四十八回大会（一九九五）において、筆者らは『子どもにとって「環境（自然）」とは何か』というテーマで自主シンポジウムを開いた。^{註1} その場で、筆者は話題提供者として、従来の保育の中での自然の扱い、研究の在り方の問題点をいくつか指摘した。そして、次のことに関しては共感をいただけたと思っっている。ひとつは、感性豊かな子どもを育てたいという願いのもとに、自然の仕組みや有機的なつながりを軽視した

愛玩物的な動物とのかかわりなどを保育の中で強調してしまう傾向に、強い疑問の念を抱かざるを得ないということ、もうひとつは、「保育に適している動物は、扱いやすく子どもに害を加えにくいウサギのような動物である」というような物言いに賛成することはできないということである。

ところで、当然のことながら、すべての大人たちが例外なくかつての幼児（子ども）であり、いま保育を受けている子どもたちも、その行き着いた者としての大人に

よって育てられている。この様な長いタイムスケールの入れ子構造的関係をもつ保育という営みの中で、環境（自然）との間にどのような関係（保育実践）を積み重ねることが、子どもの育ちを通して幾許かの明るい未来を共有できることにつながり得るのか、思っていることを以下に述べたいと思う。

あるエピソードから

今年の夏、わが家の子どもが、親類の方から「カイコ」の飼育教材のようなものをいただいた。その飼育説明書の表紙には、カイコが「ほくの体は、すごくデリケートです。大切に飼ってくださいね」と、これから育ててくれる子どもにお願いしているかわいいらすとが大きく載っていた。子どもも私も今までカイコがまゆをつくる過程を見たこともなく、いただいたのを良い機会と思い説明書を片手に育て始めた。丁寧に書いてある説明書を読み進めていくうちに「おやつ？」と思う次の文章が目に入った。「病気のカイコや死んだカイコ、ふ

ん、カイコが食べ残した乾いた人工飼料、さなぎ、ガ、などはポリ袋に入れ、台所のゴミといっしょに捨てて下さい」（傍点は筆者）というのである。さらに次のページに進むと、「まゆだけを、保存する時は、まゆになって八日目ぐらいに、カッターなどで切り中のさなぎをとりだしてください。とりだしたさなぎは、台所のゴミと一緒に捨ててください」（傍点は筆者）。さすがに、これを読んだ子どもも何か違和感を感じたようであった。

「大切に飼ってくださいね」という表紙のイラストの言葉は、カイコを育てようとする気持ちを勇気づけるものでもあるし、少し大きさにいえば、カイコにこれから起こるであろう生き様を共感をもって見とどけるためにも大切な意味をもっているともいえる。なのである。「ゴミと一緒に捨ててください」という飼育の説明書にでてくる言葉は、生き物としてのお願ひ（もちろん、大人が子どもの気持ちを引き付けることを考えて書いているわけだが）に込められた心情を切り捨ててしまうことになっている（はっきりいえば、切り捨ててもいいので

すよと明言しているようなもの)。なぜならば、一般に「ゴミ」という言葉は、われわれの生活の中ではいらなくなつたもの、じやまなもの、自分の周りから排除すべきものという意味をもって使われているからである。

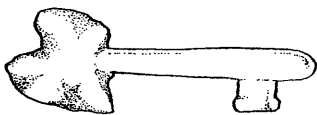
このエピソードは幼稚園での出来事ではない。しかし、大人と子どもとのかかわりのあるところでは、似たようなことがいくつもあると思う。たかがカイコ（虫）である、がしかし、されどカイコ（虫）である。たかがゴミであり、されどゴミである。筆者が些細なことにこだわっているように思われる人には、このような些細な出来事の実験の中で、子どもたちにすりこまれていく感性について思いをめぐらせて欲しいということを強調しておきたい。

身近な行動と有機的つながりへの共感

はじめにも述べたが、筆者は、子どもの育ちを通して幾許かの明るい未来を共有したいという願いをもっている。なぜならば、明るい未来をイメージしにくい現実

が、今ここにあるからである。たとえば、自然界との有機的なつながりをごとく切り刻みながら作り上げてきた現代社会の中で、その社会に適應できるよう一生懸命に育てられている子どもたちに（親の願いとは裏腹に）、ひ弱なひとりぼっちの姿を見てしまうのは私だけだろうか。次のような話を耳にした。子どもたちを連れてキャンプに行った先生からの話である。

子どもたちと河原で水に入って魚を捕ろうとしていると、立っている人の気配を後ろに感じたので振り向くと、小学生の子どもが立っていたという。その子どももキャンプに参加していたのだが、なぜか一緒に水に入ろうとはしない様子であった。しばらくのあいだ無視をしていると、子どもが不思議そうに「そんなことをして何が面白いの？」と聞いてきたというのである。逆に、



「なぜそんなことを聞くのか」と聞いてみると、「体はぬれるし、服は汚れるし、良いことなんか全然ない」という言葉が返ってきたというのである。その先生もびっくりしたそうである。キャンプに参加する子どもであつても（親に参加させられたのかもしれないが）、水遊びより自分の服が汚れることを問題にしてしまう感性を身に付けているのである。

この様な話は氷山の一角であろうと想像できる。だからこそ、そこには見過ごせない現実があると思う。自然との有機的なつながりを感性のレベルで共感できない子どもたち。耳学問的に得た言葉を並べて、自分の気持ちを説明してしまう子どもたち。この様な子どもたちを育てている現代社会に、明るい未来を期待できないことは疑いの余地がないであろう。そうであるからこそ、何が問題なのか問わなければならない。問われるべきものは社会のいたるところにある。保育としてその例外ではない。それどころか、保育は自己変化の可能性が高い幼児を対象にしているが故に、職業として子どもたちとかか

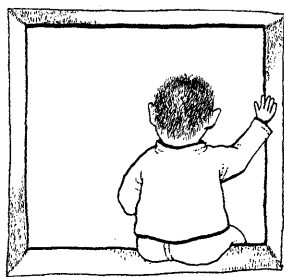
わる保育者、研究者にとつて、保育の日常は最優先課題にもなり得る。ここに、保育の日常を問う、一つの大きな理由がある。

もう一つ例をあげたい。今、ウンチのおいを消してしまう飲み薬がある。体に害はないとのことで、寝たきりの老人を看護している人や若い女性を中心に売れているらしい。それぞれに理由（事情）はあると思うし、個々のケースについては別の議論も必要になるだろう。しかし、ここでは、このことを保育の中でよく用いられる「感性」という視点で述べたい。たとえば、「自分のウンチが臭くていやだからこの薬を飲みたい」と、子どもが言いだすことを想像してみたい。保育にかかわるものならばその不自然さを感じると思う。感じるが故に、保育者は、ウンチの大切さとか役割とか少しぐらい臭くても気にしなくなるような気持ちへ導こうとするのではないだろうか。

しかし、一方で、現代社会では、そのことを不自然だと感じながらも、においに対する自らの拒否反応から、

においを消すための葉を飲む保育者もいるかもしれない。なぜならば、この葉が売れているという事実からもわかるように、大人たちの中にこのような願望をもつ隠れた支持者がかなりいると考えられるからである（もちろん、病人の看護をしている方からの需要があることも知っている）。人間をも含めた自然界とのつながりとしては不自然なものと感じているにもかかわらず、現代社会の日常的な枠の中ではそれほど不自然ではないと感じてしまうこの矛盾。嫌なものはいやだ。臭いものはくさい。そう言われてしまえば、その通りであり、その感じ方を無理に変えることはできない。そして、不自然だと感じながらもその不自然なことを選択してしまう感性というものもあることを認めない訳にはいかない。しかしそれでもなお、生き物としての人間の存在を可能ならしめている自然界の有機的なつながりに対する感性的共感を、不自然だけれどもその不自然なことを選択してしまう現代社会的感性に従属させてはならないと、強く感じるのである。なぜならば、保育が、種としての人間の存

在を保証していくための自己内包的な行為であるという見方を、筆者がもっているからである。



環境（自然）とのかかわりから

さて、保育をおこなう場において、自然とのふれあいの視点から小動物を飼うことがよくある。しかし、ある動物を飼うということは、その動物が生きるために必要な環境をも抱え込むということである。その動物の生き

さまをみるということでもある。決して、ある動物の代わりには他の動物で済ませられるというように代用できるものでもない。なぜなら、その動物はその動物としての生きざましか我々に見せてはくれないからである。

たとえば、イヌとウサギを比べて「イエウサギは飼育の際に満たすべき条件がずっと穏やかで、保育者の負担も小さくて済み、幼稚園や保育所で飼育する動物として、より一般的である」というような学会でのある発表の結論ですむような話ではない。確かに、安全で楽な方が保育者にとって都合が良いこともある。しかし、イエウサギはイエウサギとしての生きざましか見せることはできないし、イヌはイヌとしての生きざまを見せるのである。子どもによっては動物の違いでそのかかわり方、感じ方も違うはずである。糞ひとつとってもその扱いが違ってくるであろう。だからこそ、それぞれに意味があるのだとも言える。むしろ、「一般的に、どの動物が保育に適するか？」という問い自体が、意味をもたない」と筆者は考える。初めにも述べたが、動物を飼うとい

うことは、その大変さまでも含めて背負うことであるし、飼う当事者の判断で決めるべきことだからである。そして、もちろん、保育所や幼稚園などで動物を飼うということは、単に子どもを喜ばせることではなく、悲しみも恐れも楽しみもそして喜びも動物とかかわることの中であじわい、想像力を高めていくことのできる環境構成を行うことに他ならないと考える。

おわりに

子どもたちに豊かに感じる心を育てるためには、自然とかかわりは確かに大切だと思う。しかし、それはただ与えていけばよいというのではなく、保育者が自然の中身をどの様に子どもたちに示しているのかと、常に問い直すなかでなされなければ意味がないということを繰り返して述べたつもりである。「汚い」、「臭い」、「面倒」といったことが自然とかかわるなかで、他のものとのつながりにおいて感性的に止揚されるような保育実践が積み上げられることを願いたい。

くどいところ、足りないところがあつたかもしれない。異論、反論を含め、目を通された方々からの御意見をうかがえればありがたい。

(付) 自然(環境)について

「自然」という言葉を、人の影響をまったく受けていないもの、人間の手がはいっていないもの、というような意味でとらえれば、日本(地球上と言ったほうがよいのかもしれない)のなかでその様な場を探すことはまったく不可能と言えるほど、現在の自然環境は人間によってその意味を(無自覚的であれ)変えられてしまっている。たとえば、北極や南極ですら大気や海水の成分に人間の活動の影響を見ることは難しくなく、フロンなどのガスによるオゾン層の破壊は、地球の自転や大気の流れに影響を受けながらであるが、人間の仕業としての痕跡を明確に示している。この様な事象の中で、「自然」と「人工」という使いふるされた二項対立的な言葉は、ほとんど意味をなくしてしまったといえる。したがっ

て、自然があるとかないとかということにとらわれた見方ではなく、「環境」という視点で「人間と自然」をも含み込んで今の状況というものをつかんでいく必要があると考える。つまり、どのような自然が我々のまわりにあり、日々の生活の中でそれとどのようにかわっていくのかということが重要な問題になっていることである。このことは小川博久氏も述べているように、我々を取り巻く「環境」というものを主体としての人間を抜きにして客観視できないということでもある。

(筑波技術短期大学)

注1 根津明子(企画者)『保育の日常を問う 子どもにとって「環境(自然)」とは何か―小動物の飼育の在り方を事例として―』 話題提供者(阿部康子、高橋健介、新井孝昭)

注2 小川博久『「環境教育」における多様性をどう統合するか―エコ・ミュージアムの実践の検討を通して―』東京学芸大学環境教育実践施設研究報告「環境教育研究」第5号、11―28 (一九九四)

保育を裏付けるものを考える(2)

—— 米国の実践例から学ぶこと ——

森 眞理

米国では一九六〇年代の公民権運動を出発点として、

一九九〇年代には、人種・差別に伴う行動様式や社会階級に対する偏見・差別是正、民族・言語・宗教等文化の多様性に目を向け、違いを知り受け入れ合うことがさかんに叫ばれている。多くの幼児教育者も一人一人の子どもの背景に目を向け尊重しようと声を上げている。

現実の保育の場でどのようにこれらが反映されているのであろうか。米国の幼児教育者は、どのような裏付けに基づいて保育を展開しているのであろうか。筆者は大

学院の幼児教育学科専攻学生としてある幼稚園にて一学期間（一九九三年二月―五月）参加実習した。そこでの子どもたちと教師の取り組みを見ながら保育の裏付けについて、更に米国の実践から日本の保育者への課題についても考えてみたい。

尚、本稿の幼稚園実践例はほんの一例にすぎず、米国全ての幼児教育を語っているものではないことをあらかじめ断っておく。

◆米国ニューヨークのキンダーガーデン^{注①}(幼稚園)における主題『城』を中心とした展開

筆者が参加実習したキンダーガーデンは、私立で大都市中心部にある。実習したクラスは、全員男児、十名であった。担任教師は女性で、小学校、中学校教師として十数年の経験を持ち、在職三年目であった。

一月からすでに二学期^{注②}が始まっており、子どもたちは担任やキンダーでの生活に慣れ親しんでいた。筆者がそこで強い関心を抱いたのは、『城』という主題を中心にした様々な活動であった。

ホールランゲージ(全言語活動)

壁の装飾(写真1)やカレンダー(写真2)等の環境設定から絵本、ごっこ遊びや積み木遊び(写真3)に至るまで、『城』という主題に添って活動が展開されていた。

担任教師は学年当初、自由遊び時などを通して一人一人の子どもの様子を観察し、それぞれの興味・関心を把



▲写真1 壁も『城』の活動の場

掛けて後方に下がって見ている。また城を手にとると担任（T）に近づき、見せる。

R ねえ、このしろどこにあるかしら？

T さあ、どこかしら？

R どこがいいかなあ、まわりにいけがあつてかんたんにしろにはいれないの。

T 池に何かいるの？

R ううん、いまはいないよ。

T 池の周りには？ 何かはえているかしら？

R くさとかきとか？

T 面白そう。

R それじゃあ、きとかくさとかつくろうか？

T どうやって草とか木になるのかしら？

R たねまいたり、ねっこもってくるの。

T 種まきしたことある？

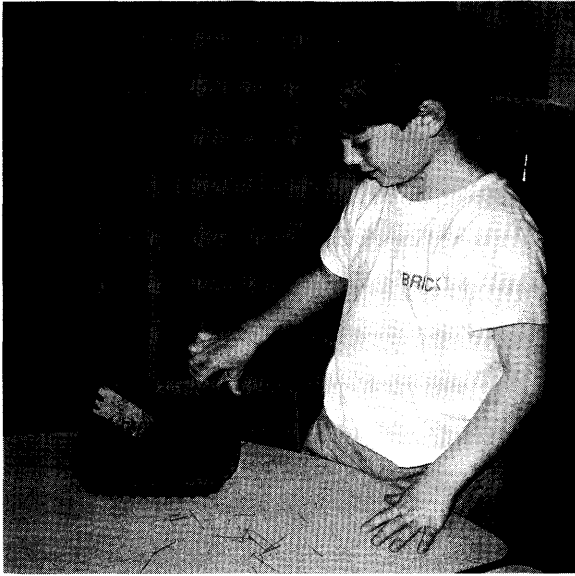
R ある、ある。カントリーハウス（田舎の別荘）でやったよ。

T ここでも出来るかしら？



▲写真3 積木の置き場所にご注目！

R できるよ。たねもってこよう。
この会話の後、担任が種を持参し一人一人が城と敷地を作り、種をまき、草が育つ様子を観察、手入れをした（写真4）。



▲写真4 城の敷地の手入れに専念

担任はRの意見を尊重しつつ言葉かけをしていた。これは、筆者にピアジェの「意味ある学びは子どもが質問するところにある」⁽¹⁾という言葉を思い起こさせてくれた。と同時に、筆者には担任がRの発達段階を前操作的思考期から具体的思考期への移行の段階であると捉えていることが手にとるようにわかった。これは、担任が認知的視点に立ち、子どもと活動を捉え子どもの発達を促している様子であると見受けられる。

3 美術館見学 — 社会、文化に適切な視点から —

月曜日の朝、Cが母親と登園。近所の美術館で開催されている『紋章、鎧かぶと』展に家族で行ったことを担任に報告した。母親は案内書を担任に手渡し、『城』の活動の一端として見学に行ったらどうかと提案する。担任は、早速『朝の会』で取り上げた。Cが話し始めると、それに対し様々な反応が起こった。

E CがみたのはAがおかあさんのくんでみたのとおんなじ？

A それって、フランスでのこと？

C フランスのもあるし、イギリスのもあったよ。

R ミス、モリ（筆者）のジャパンもあるかも？

子どもも同志が活発に意見を交換していた。そして、展覧会に行くことを決め、計画を立て、遂行した（写真5）。担任が保護者に園での活動を手紙や口頭にて報告していると共に保護者の参加、関与を歓迎していることがわかる。また、担任が一人一人の子どもの背景に配慮していることが反映され、子どもたちが筆者の背景についても興味を示したと思われる。保育の場を、担任が多様性を持つ社会・文化の一部として捉えていたからではないだろうか。

◆実践例から学んだこと

倉橋惣三は次のように語っている。

『子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもあ



▲写真5 世界中の『紋章、鎧かぶと』が

る。しまったと急に冷汗の流れ出ることもある。ああ済まないことをしたと、その子の顔が見えてくることもある。——一体保育は……。一体私は……。とまで思い込まれることも屢々である。大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は、一步進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから。』⁽²⁾

これは、筆者自身過去九年間の日米双方での幼稚園教師として実践の中で思いを巡らしていたことである。筆者自身、体験を通して保育の裏付けの欠如に気付き、再び米国で幼児教育を学び始めた。

今回参加実習で出会った担任教師は、直接一つ一つ語らなくとも彼女が学んできた発達心理学や教育心理学の知識をもとに、実践を展開していた。その上、担任が特定の理論に偏ることなく広い視野を持ち、子どもの育ってきた環境や背景にも目を向けてそれらを生かしつつ保育を展開していたことに、筆者は深い感銘を受けた。

子ども——子ども、子ども——教師、教師——保護

者、子ども——教師——保護者という相互間の関わり合いを大切にし保育が展開されていた。こうした関わり合いの中で、担任は、保育者一人一人が、自分の保育実践の裏付けとなる視点を持ち、更に多角的な視野を持って保育にあたることを筆者に教えてくれたのである。

◆日本の保育者への課題

保育の場は、個人が生まれつきもっているもの、育てられ、育ててきたものが周りの環境との関わり合いを通して自分のことを知り、相手のことを知る所、すなわち人格形成の礎となる大切な場であると筆者は考えている。

それゆえ、子ども一人一人の成長・発達に携わる保育者の果たす役割は大きい。はっきりと目には見えなくとも保育者のものの見方・保育への姿勢・子ども観が子ども自身の身の回りのものに対する考え方に影響を与える

と言っても過言ではないと思う。これは、すなわち保育者自身、保育を裏付けるものが何であるか考えているだろうかと自己省察することではないだろうか。

今回、筆者自身が体験したこと、学んだことを少しでも実践に従事している保育者と分かち合えれば、と思う。保育者は子どもを見る目を養うために様々な理論があることを、そしてそれらはそれぞれの時代の社会の動きや子どもの文化背景によって捉え方も変わってくることに目を向けつつ、試行錯誤する研究者でありたいものである。

現在保育に従事していることは、次世代の社会を担う人間とともに学び育ちあう環境に在ることである。これを保育者一人一人が気づくことである。そして学ぶ者であることの喜びを自覚することから始めて、自己の保育の裏付けを探究していくように子どもと共に成長していきたいものである。

(コロンビア大学大学院博士課程

元東洋英和女学院大学短期大学部)

注

(1)米国のキンダーガーデンは、日本の年長児保育にあたる。多くの州が義務教育の一貫として捉えており、公立小学校に連結されている所が多い。

(2)米国の学年は、九月入学、進級で五月終了が多い。殆どの学校教育機関は一年を二期に分けている。中には、一年を四期に分けるところもある。

引用文献

(1)Forman, G. (1987). The constructivist perspective.

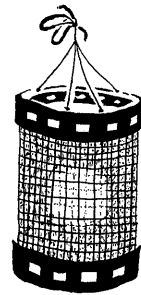
In Johnson. R. (Ed.). Approaches to early childhood education. Columbia: Merrill Publishing Company.

71-83.

(2)倉橋惣三(一九七六)『育ての心』フレーベル館

震災後の子どもたち(3)

『震度1、震度2、震度3……』



南 佑子

はじめに

一月十七日未明、阪神淡路大地震が神戸を襲った。震度七という激震により、私の前任園（御影幼稚園）は全壊してしまった。

この園は、創立百周年を数える歴史の古い幼稚園である。戦災で焼失し、その後再建されて四十五年を経た木造の園舎であった。

子どもたちの消息を求めて

震災直後から電話はほとんどかからず、交通網は途絶、二輪車・徒歩しか交通手段のなかった中で、何等かの方法でやっと出勤してきた職員と共に子どもたちの消息を求めてあちこち尋ね歩いた。御影の町は跡形もなく壊滅状態で、倒壊家屋が道をふさぎ、鉄道の高架は垂れ下り歩くのも困難な状態で

あった。個々の子どもたちの家を訪ねて全員の安否を確かめるのは不可能な状況であったので、取り敢えず避難所にあてられている近隣の小中学校に行ってみた。やっとたどり着いた避難所で会った子どもたちは、恐怖と異常な状況のためか黙りこくり、ひきつった表情を見せていた。言葉をかけると「先生」とそれでも笑顔を見せてくれたが、ショックの大きさがその表情からよみとれ、事態の深刻さが窺われた。子どもたちの自宅は過半数が全半壊しており、全員の消息がつかめたのは震災から一週間余り経ってからであった。

幼稚園の再開

私達は子どもたちの恐怖や緊張感が和らげばと思いい、遠方に疎開している子どもたちには電話や手紙で、避難所にいる子どもたちは度々訪問して励ました。しかし、訪ねる度に子どもたちの表情が暗く

なっていくのが気がかりであった。公園や学校の運動場は避難者のテントや車があふれ、道路は歩くのさえも危険で、遊び場や遊び友達をなくした子どもたちに元の活気を取り戻させるためには、一日も早く幼稚園を再開し、そこで楽しく過ごさせることが何より大切なことではないかと考えた。隣接する小学校はどの教室も避難者で一杯であったが、学校側のはからいで市民図書解放教室を借用することができ、安全点検を済ませた後そこで保育を再開することにした。

再開当日登園できたのは八十一人中二十八人であった。保護者同士は涙の再開であったが、子どもたちは友達と抱き合ったり、肩をたたき合ったりして、久しぶりの再会を喜んでいった。

五歳の子どもがこんなにも友達や幼稚園を大切に思い、登園することを楽しみにしている、幼稚園が子どもたちの生活の中心になっていたことを改めて知った思いがした。

幼稚園再開の三日前には隣接する小学校も再開されていた。まだ水道やガス等のライフラインが復旧していなかったが、幼稚園、学校の再開に伴い疎開先から自宅に帰ってきた子どもも多く、登園する子どもの数は日を追って増えてきた。なかにはどうしても友達に会いたいからと大阪・尼崎・三木・三田市などの疎開先から一時間余りもかけて園に通ってくる子どももあった。

大阪市に疎開しているT君は朝起きるのが苦手であった。しかし、震災後は朝六時には目を覚まし、身支度をすませ「さあ、幼稚園に行こう」と登園をせがむのだという。このように子どもたちの熱意にほだされて遠方からバスや電車を乗り継ぎ、幼稚園に子どもを連れてきた保護者も多かった。保護者自身も、幼稚園で教師や顔見知りの保護者と話し合ったり励まし合ったりすることが楽しみであったようだ。幼稚園が保護者にとっても心の安定の場となっていたような気がしている。

救急車 大きらい！

三月になったある日のこと。砂場で友達と仲良く遊んでいたT子。救急車のサイレンが聞こえてくると「私、救急車大きらい！」と両手で耳をふさいで保育室に駆け込んできた。

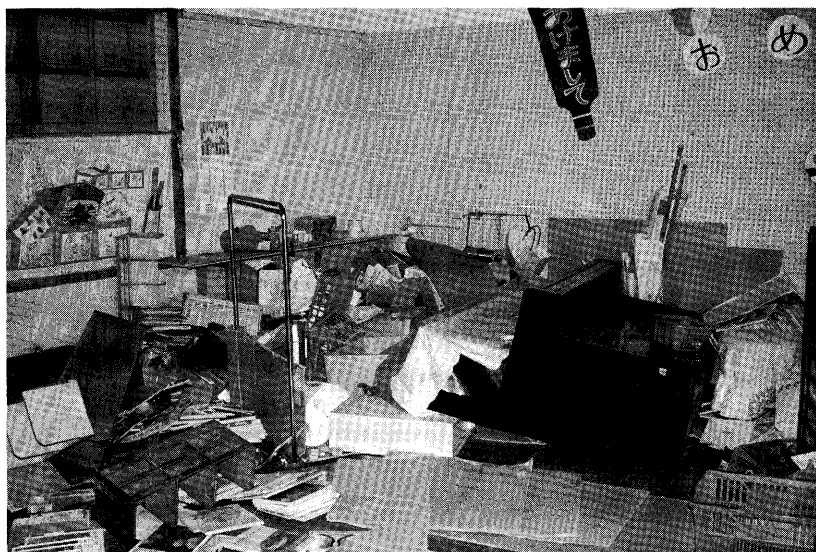
震災後ひっきりなしに聞こえていた救急車のサイレンとヘリコプターの音は耳について離れない。このようにサイレンやヘリコプターの音には異常に反応する子どもがある。これらの音を聞くと、地震の恐怖と当時のあの緊迫した雰囲気を出すからなのである。

また、S君のように「毛布大きらい」という子どももいる。亡くなられた方の遺体を毛布で覆っていたからだという。夜寝る時今でも決して毛布を使わないそうである。

大方の子どもたちは寝ている上に家具やテレビが落ちてきて、暗やみの中で恐怖を味わった。震災以



▲倒壊した木造園舎



▲ピアノが転倒し、ミキサーでかきまわされたようになってしまった室内

後、家庭では子どもたちに次のような変化が見られたようだ。

- ・暗闇を極端に恐がり、電気をつけていないと寝られない。
- ・地震や火事に関する遊びをしたり、絵をよくかいたりする。
- ・ちょっとしたことでも泣いたり、幼児語を使った

り等赤ちゃん返りが見られ、わがままになった。これらの症状は地震のストレスからくるものであり、専門家からも指導を受けながら、幼稚園では十分にスキンシップを図り、不安を取りのぞくように努めた。

不自由な生活の中でも

ブランコに乗っているA子、「震度1、震度2、震度3…」といいながらブランコを揺すっている。子どもたちは覚えた言葉を素早く遊びに取り入れて

いく。「給水車」「避難所」「救援物資」「ボランティア」。この度の震災を通して、このような耳慣れない言葉をうまく使って遊んでいる。子どもたちの明るさ、たくましさ、ともすれば落ち込みそうになる私達

は多いに励まされ、力づけられたような気がする。「先生、私とお家みつかってん。六人でギューギュー詰め」「僕とこの家、昨日解体やってん。でも、車助かって良かったってお父さん言ってた」「昨日ガスきてん。お風呂に入れて気持ち良かったよ」等と震災後、子どもたちはこのようなことをよく私達に話してくれた。子どもたちは環境に敏感に反応して生活している。そして家族の喜びが子どもたちの心を明るくする。子どもながらに家のことがやはり一番の関心事だったのであろう。

おわりに

震災後七か月が経過し、子どもたちは表面的には以前と変わりがないように見える。

しかし、七月七日の七夕祭りの笹飾りの短冊には『もう一生地震がきませんように』『こわい地震がきませんように』等と地震に関する願いを書いているものを多く見かけた。

また、先日ある精神科医から、最近チック症状がひどいと診察を受けにくる子どもが増えているという話も聞いた。この子どもたちの心の傷が完全に癒えるのにはまだまだ時間がかかるだろうと思う。

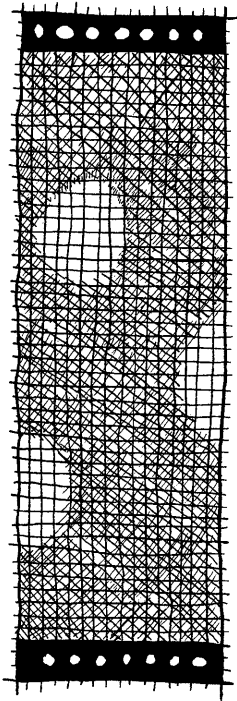
私はこの子どもたちと同じ年齢であった昭和二十

年の三月十七日、神戸大空襲の戦火に追われて町中を逃げまわった体験をもっている。

今振り返ってみると、この時とこの後の苦しかった体験が、私の生き方に強い影響を与えたように思われてならない。

この震災というつらく恐ろしい出来事に遭遇した子どもたちが、挫けず、この体験をバネにして、強く、逞しく生きていってほしいと願っている。

(神戸市立神戸幼稚園)



トポスにおける発達

第 5 回

— 声と言葉 —

無 藤 隆

声の響く範囲としてのトポス

言葉は声である。小さい子どもにとっては確かにそうだ。文字による表記また印刷物は、現代の社会では、子どもの世界でもあふれ、早くから接している。だが、たとえ文字の読める子どもでも決してその生活の中心を占めることはありえない。いや、ほとんどの大人にとってもそうである。声により言葉を交わすことが生活の中で大事な位置を占めている。そもそも、人と人との関係を維持することが言葉によっているのであり、声を発し、声を聞くことである。声による言葉を文字に直して手紙としてやり取りをしても、同時性が保てないし、表情や身振りが伝わらない。だが、もっと本質的なことは、声自体が響かないために人の関係の形成が難しいということである。

小さい子どもは、現代の文字文化の中に暮らしているのではあるが、文字が読めない、また読めても十分に活用したりはしないために、また直接的な人との接触を求めることもあって、圧倒的に声による言葉に

よって生きている。しかし、それがいかなる様相を示しているのかは、ほとんど検討を受けていない。おそらく、今まで「幼い」とされていた特徴が実は声の文化の特徴でもあり、確かに幼児の未熟さがあるにせよ、その未熟さは声の文化に適應するのに具合のよい面も持っていることが分かるだろう。

文字を読むこと、書くこともその元にある声を聞いているのである。声の世界に根ざした読み書きであるからこそ、それが生きたものになり、生活と結びついたものとなり、その人の言葉となる。言葉とは、声を交わす関係から発生するものだからである。

トポスという観点から見たときに、声は二重にトポスを定義する。一つは、声の響く元である身体である。声は口から出て、耳で聞かれる。そこで聞こえるものは、身体という共鳴器により増幅されたものである。その上、身体は単なる増幅器ではない。声の発する元であり、声の届く先である。声が身体から発せられるからこそ、声に表現された考えはその人の内面か

ら発せられたものとして受け取られ、つまり深みを持ったものとなる。声が人格を具現化し、人格同士の間関係を生きたものにするのである。

もう一つは、声の届く範囲としてのトポスである。語り掛ける声は機械的に増大されない限り、ある距離、高々、数メートルから十数メートル程度までしか届かない。普通の家庭の部屋の広さであり、幼稚園の保育室の広さである。大声を出しても、五十メートルは辛いだろう。幼稚園の園庭などは大体はこの程度だ。核家族の住む家ならば、大声を出せば家中に響いてしまう。声の届くことが人と人が直接に語り合える距離にあるということである。顔を合わせたの直接的な関係を構成できる場の範囲がそこで決まってくる。

声は、ボールを投げるように誰から発して誰かに届く。同時に、その届く過程でまわりに波紋のように広がり、その場を音で埋め尽くす。コンサートホールが交響楽団の奏でる音で充滿するように、もっとスケールは小さくても、どんな声もその場を埋め、その場に

ある人を結び付ける。同じ声に浸る者としての関係が生まれる。声を発する人も、自らの声を聞き、その反響を聞くことにより、自分の声の中に浸るのである。声は発する人、語られる人という焦点を持ちながら、その場に満ちたものになる。

さらに細かく言えば、ささやき声、普通の声、大声、となり声などに応じて、距離をさらには親密さを分けることが出来る。ささやき声は声が小さく、その外にいる人を排除すると同時に、声が息と混じり、息も掛かるような関係であることを意味する。大声は多くの人を相手にする場合に使われる。声の大きさや通りやすさを基に、その声が求めるトポスの範囲を推定できることになる。だが、この問題の検討以前に、声が言葉として持つ特質そのものを把握しなければならぬ。

声の文化

声に基づいた言葉の文化と文字に基づいた言葉の文

化を対比して、最も明晰に論じたのが、オングである（W・J・オング 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店）。オングは、古代ギリシャ以来の西洋の歴史的な研究から文字と印刷に基づいた文化によってそれ以前の声による文化が消えていきまた変容していく様子を描いている。文字文化による発想からの従来の歴史研究を批判し、その再検討を促しているのである。その中で明快に声の文化の特質を抽出している。それを紹介し、現代日本での幼児について、それがどのように適用できるかを考えてみよう。

言葉の何よりの特徴は、リアルタイムで発生し、消えていくということだ。音は常に、聞こえたときには既に消えようとしている。声を録音しない限り後に残すことは出来ない。一回限りの出来事である。声を印刷物のように何度も見返したり、遡ったり、見比べたりは出来ないのである。仮に録音したところで、聞き直すときにはやはり同様に生じては消えていく。

言葉を発することは声を出すことであり、声を出すことは行動することである。行動とは身体を用い、力を振り、対象に対して相手に対して働きかけることである。同時に、自らの内から発するのであり、力動的なものである。

声による言葉は、記憶することに対して負荷が大きい。沢山のことを覚えなくてはならない。紙に記した文字を見直して考えたり、以前の記憶を辿ったりは出来ない。誰かを相手にしての会話にしてもその流れを覚えている必要がある。まして、昔話や古代ギリシャのホメロスといった伝承的な長い話となれば、特殊な記憶のための工夫を施さないと覚えきれない。近年の研究では、忠実に以前通りのことを再生するのではなく、その場に応じての変奏を行っているようなのだが、それにしても膨大な記憶の量である。その秘訣の一つは、すぐに口に出るような記憶しやすい方法に基づいた型通りの言葉、決まり文句を多用し、またリズムカルな言葉を利用することである。

以下に、オングの整理による声の文化の特徴を挙げよう。

(1) 累加的である

複雑な構文ではなく、「そして」でつながるような次々につなげていく言い方をする。

(2) 累積的である

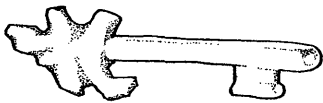
決まり文句としてまとまった表現をする。例えば、

「勇敢な兵士」、「頑丈な樫の木」といった決まり文句は覚えやすく、使いやすい。

(3) 冗長であり、多弁である

言葉は発せられすぐに消えていく。話の筋を辿っていくには、ゆっくりと進んでいく必要がある。直前に言われたことを繰り返しつつ、進むのである。

そこで、聞き手にとって聞き損なっても補える。話し手も繰り返す間に次の言うべきことを考



えられる。

(4) 保守的であり、伝統主義的である

長い間を掛けて記憶したことを口に出すことになる
と、昔の繰り返しになりやすい。話はその時々
の状況で変えられていくにしても、それは、手
持ちの決まり文句やテーマを組み替えていく
のである。

(5) 生活世界への密着

生活の中でそれに密着した形で使われる。
観察し、実践し、その中で言葉によるやり取り
や説明がなされる。

(6) 互いに競い合う

言葉や知識を他者と競い合う形で用いる。
諺やなぞは言葉による知的な競い合いのための
武器である。一人がなぞなぞを出せば、もう
一方も別ななぞなぞを出して、挑戦に
応じる。自慢をし合い、賛辞を交換する。

(7) 感情移入的であり、参加的である

学ぶということ、知るということは対象との密接で

感情移入的で共有的な一体化を行うことである。それ
と一緒になるということである。相手の反応は個人
的主観的なのではなくて、共有的な反応の中に共に
包まれるものである。

(8) 恒常性維持的である

もはや現在とは関係のない記憶は捨て去る。言葉は
今ここで用いられている生活の状況によって統御され
る。状況は、他の語のみならず、身振り、声の抑揚、
顔の表情、さらに、全人的な状況をすべて含むので
ある。語の意味は絶えずその現在から発している。

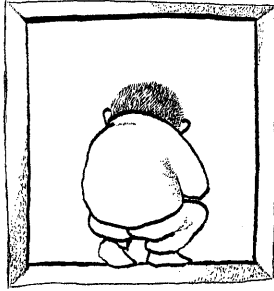
(9) 状況依存的である

概念が実際の状況で使われるものとして理解され、
用いられる。

単独、対話、共同

オングの議論から、小さな子どもを念頭に置きなが
ら、そこでの声の文化の特徴を探ってみよう。声を持
つ特徴の一つは、焦点がありながら、場に響いていく

ということである。また、声の大きさの調整が出来、かつある程度、方向性を持つということがある。そこで、独り言、一対一、一対大勢といった様々な関係を取り結ぶことを可能にする上に、それが厳密には守れないという特徴が生まれる。独り言のつもりでも他者に聞こえる。相手に話したつもりでも、他の人もその場にいれば聞くだろう。逆に、そのつもりでも、相手



には聞こえていないかもしれない。考え込むような声はその人の内側へと反響し、相手に聞き取ってほしい声は相手に飛び込んでいくように響く。大勢に語り掛けると、声は広がっていく。そして、それらの特性は、どんな声でも多かれ少なかれ並列的に持つものである。内に響かない声はなく、だから、その人の語る声なのである。

声は物理的に届くだけでなく、常に、気持ちを表し、感情を伴う。言葉で表す以上に直接に現れるように感じられる。その気持ち・感情は相手を巻き込むものである。感情がそもそもそうであり、その上、声は聞く側も包み込むからであろう。

声はまた、複数の人が語るときに、ハーモニーを作り出す。多様な声が響き合い、一つの音楽のように混じり合った声の流れを作り出す。交替で話すにしても、一緒に声を出すにしても、そこに音の調和が生まれ、異なる声の調子の対照が生まれる。声を出すことは一人の作業でありながら、ハーモニーの中で、共同

の調子が形成されるのである。声には、本来的に、個性と共同の關係の芽が含まれている。

定型性と現在性

オングの指摘するように、声の文化は、型通りの決まり文句を多用する。だがまた言葉の意味が現在の状況とやり取りから生まれることも確かである。オングは両面を指摘しているが、その研究が伝統的な文化での口承文芸を題材にしていることもあり、記憶の負荷とそれを軽減する方策の分析に寄っている。小さい子どもを見る限り、人前で口誦するような、多大な記憶の負荷を必要とする課題であるのではない。むしろ、現在のやり取りによって言葉が生まれ、意味が規定される面が強い。

決まり文句的な定型的な面が小さい子どもでも重要ではないのではない。いやむしろ、多くの子どもの行動は一見したところで定型的である。例えば、茶碗があれば、飲む真似や、乾杯したりする。食事の時は、「お

いしい」と言う。決まりきった型の遊びをし、同じような状況なら同じような言い回しをする。言葉にせよ行動にせよ、そのレパトリーは少ないのだから、それはむしろ当然のことである。少ないなりに多様な状況に対応するには、型で対応できるものは出来る限りそうしなければ、生きていけない。記憶の力も乏しいから、決まり文句を使うことは役立つ。決まり文句とまで行かなくても、同じ言い回しを繰り返し用いる。また、言葉遊びなど決まり文句や繰り返し面の面白さを利用した遊びである。

だが、またまさに現在に生きることにより、その決まり文句に血を通わせるのも子どもの特徴である。その声の調子や表情、またちよつとした言葉の場に応じた違いなどが新たな意味をそこに作り出す。少なくとも子どもの気持ちが自在に動いていればそうなるだろう。

小さい子どもが現在に生きることの端的なときは、物に関わり、その物を介してのやり取りをする場合で

ある。砂場遊びでも積み木でも、子どもはその対象に
対して働きかけている。他の子どもや保育者とのやり
取りは、その物への働きかけの流れにいわば棹指すこ
とである。その場合、声を使うことは、その働きかけ
・動きに対して外から関わることを可能にする。声は
動きに対して重複できるからだ。そこで声による言葉
は対象や動きとの関連で理解される。声による言葉
は、動きが作り出す流れそしてその流れの生じている
小さな場に関与し、そこでの流れに意味の修正を加え
る。子どもにおける言葉とはそのような動きの場にお
いて、動きとは別の次元からの関与を可能にするもの
である。

あいまいさ、聞き忘れ、矛盾

声は生まれては消えていく。だから、実は、必ずし
もその総体を適切に理解される保証はない。小さい子
どもが声による人とのつながりに入り込むとすれば、
それは、ゆるやかなつながりのはずである。言われた

ことのあるところは忘れるだろうし、そもそも、気づ
いていなかったり、無視したりするだろう。自分の言
うことだって、先ほどのことを忘れ、関係のないこと
や矛盾したことを言うかもしれない。一貫性が乏しい
どころか、相手とやり取りすること自体に継続して集
中しているとは限らない。他の注意を引くものとの間
で揺れつつ進むのが、小さい子ども同士のやり取りで
ある。子どもと大人のやり取りが一貫し、つじつまが
合うように見える相当部分は大人がうまく調整してい
るのである。あるいは、一貫するところだけを注目す
るからそう見えるのであり、子ども同士でも話を通じ
るように思えるのは、互いに適当な部分を注目し、適
当に無視し合っているからこそである。これもまた、
小さい子どもの未熟さが声によるやり取りと見合った
特徴を作り出していることの現れである。

(お茶の水女子大学)

ノンヴァーバルコミュニケーション

松井 とし

うさぎルンルンとのコミュニケーションの始まりはこんなことだった。

鼻のところをなでてやると、「ありがとう」とでもいうように、私の手の甲を小さな舌でペロペロとなめる。そしてまた、自分の頭を私の手の下にすべりこませる。まるで「もっとなでて」と言わんばかりに……。

長生きしたおばあさんうさぎが静かに息を引き取ってから一年近く、私たちはうさぎを飼わなかった。何か物足りないような、寂しさはあったが、日曜日や長い休みには気が楽だった。モルモットや小鳥は、子どもたちが家庭にもち返って世話をしてくれたので「環境の変化に弱い小さな生き物に、いつもと異なる環境を耐えさせている」といった後ろめたさを感じることなしに過ごすことが出来たせいだろうか。

そんな秋のある日、地域の方から「うさぎの赤ちゃんを飼って貰えないだろうか」とい

う電話があり、かわいいパンダうさぎ二匹が幼稚園にやってきた。こうして、手の平に乗るほどに小さなうさぎたちとの日々が始まった。名前はルンルンとミーミ。おばあさんうさぎの放し飼いの経験をもとに、新たな飼育のテーマは「いかにうさぎらしい生活を保障するか」であった。放してやるとそれぞれのテリトリーを主張するかのようになり、園庭の左と右へわかれてピョンピョンと走り、草を食べた。

ルンルンは私の手だけでなくミーミもなめてやっていたが、その光景は慈愛に満ちていてまるで母親が子どもをかわいがるといった雰囲気だった。ルンルンは小さな頃から決してビクビクすることなく気高く、私たちに対する信頼を感じさせる存在だった。その後多くの子どもの優しい母親になったが、なめることは彼女だけがもっていたコミュニケーションの手段であったように思う。

ルンルンとの心の通いあいを重ねるにつれ、私は言葉に頼らないかわりを大切に思うようになっていった。たとえば、泣いている子どもには「悲しいね」という気持ちで頭をなでる。心弾んでうれしそうにしている子どもには「よかったね!」という気持ちをこめて笑顔を返す、といったように……。

ルンルンとのコミュニケーションは、私の保育の質を変える「初めのいっぽ」であった。

(元幼稚園教諭)

保育環境について考える(4) 園舎

原口 純子

はじめに

平成七年度より幼稚園の設置基準が改正されました。一学級の定員は四十名以下から三十五名以下に引き下げられました。施設・設備等でも規制緩和がなされています。園舎の階層制限が、平屋建の原則は緩和されて、二階建以下を原則とされました。園具・教具についてもプランコや砂場といった具体的規定ははずされ、大幅に大綱化されました。

私達は保育の環境と言うとき教材や教具を考え、園舎

は既に決まったものとして諦めています。けれども日々の保育をする上で、園舎の在り方は大変大きな影響を与えています。

今日強く求められている、幼児の主體的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるためには、園舎はどのようにあつたらよいでしょうか。

幼稚園の園舎の持つ意味と役割は、教科中心の小中学校の場合と異なり、園舎そのものが環境としての性格を持つことです。従って、園舎の設計も、一定の敷地の中

で、園庭をどの方向に取り、保育室や昇降口をどう配置するかは、建築設計士の仕事以前に、保育者の仕事でなければなりません。建てられた建物に保育を合わせるのではなく、保育に建物を合わせて建てなければ、意図する保育効果を上げることがむずかしいのです。一度建った建物は三十年以上使い続けなければならないのですから、保育の現場の意見を設計には十分いかしていたいただきたいものです。

当市は公立幼稚園が十八園あり、古い園舎もあります。昭和三十五年以降に建てられた園舎が十二園あります。園舎は時の行政に当たった人々の考え方や、予算によって実に様々です。また園舎にはその時代の流行があり、建築雑誌に載るようなモダンなものあり、自然回帰で木造ありと、それはまるで幼稚園の住宅展示場か見本市のように様々なものがあります。

いろいろな園舎に出会って、幼児と生活をしてみて、外見がどんなにモダンで素敵でも、怪我が多く、禁止やお約束をたくさんしなければならぬ園舎や、逆にみす

ぼらしい建物でも、伸び伸び遊べる使い勝手のよい建物など、園舎の設計によって、幼児の生活はとて大きく影響を受けていることを痛感しました。

◇園舎と園庭のつながり

本来学校（園舎）の建築は教育制度や教育思想と一体となるべきものです。

一斉課題活動型の保育と、幼児の主体性を重んじ、遊びを中心にした保育をする場合の、園舎構造の違いのポイントは、園舎と園庭のつながり方にあるように思います。

1 閉鎖型園舎（図A、図B）

昭和三十年代に建てられた閉鎖型の園舎の特色は保育室と園庭の分離にあります。

- (1) 保育室から運動場が見えないように廊下や建物で遮蔽している。
- (2) 他のクラスの幼児が保育室の前のテラスを通らないようにし、クラス独立性を保つように配慮している。
- (3) 各クラスの前に専用のテラスや中庭を設けている。

中庭の空間に作った砂場は四歳児にはこじんまりした、安定した場所として良い面もあるのですが、年長児にはもの足りません。

しかも、これらのタイプの園舎は次の理由によって保育者にも幼児にも生活のしにくいものでした。

・保育室から運動場やプレイルームが全く見えないために、安全管理上幼児だけを自由に出入りさせられず、常に教師と一緒に「先生お外に行っていないですか」と許可を得て出なければならぬ。

特に四歳のクラス担任は幼児だけを園庭に出せず、全員室内遊びをやめて一斉に連れ出し、また、外遊びの後も、幼児を残さず室内に入れなければならない。

他園に比べて怪我が多かったのもこの建物です。幼児の意欲も自発性も建物故に制限されます。

・学級閉鎖性が強く、一斉に集めて保育をするのには向いています。幼児を自由に遊ばせるのには不安がある。

・ペアになっているクラス同士は仲良くなれるが、離れ

た棟の様子がわからない。

・昇降口が保育室から遠く離れているため、幼児を担任が迎えにくい。

2 解放型園舎（図C、図D）

解放型園舎の特色は、保育室が園庭に向かって解放されている構造にあります。

(1)廊下、保育室、テラス、プレイルーム、園庭を、幼児が自由な空間として使える。

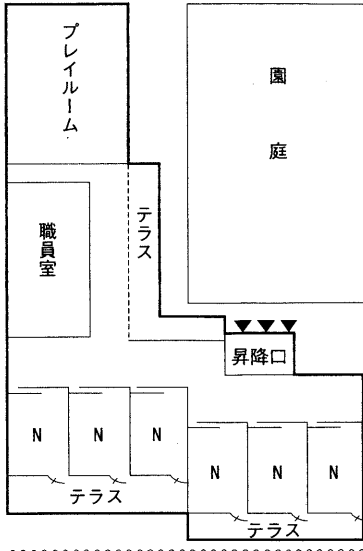
(2)教師の目が、内外ともによく届く。

(3)学級閉鎖性がなく、テラスでも、クラスでも学年が一体となって遊べる。

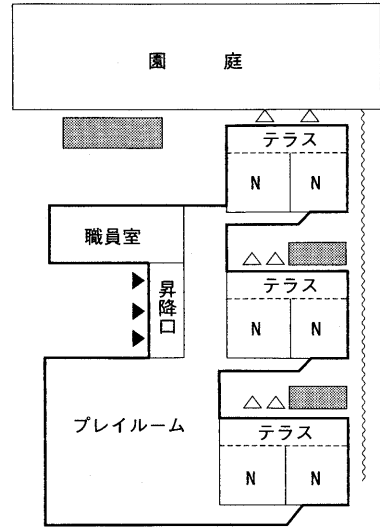
(4)単純で目の届く園舎は、園舎構造に基づく約束ごとや禁止が少なく安全である。

(5)昇降口が各クラスについているため、担任は幼児を直接迎え入れたり送り出すことができる。

以上のことから、幼児が主体的に環境にかかわって、遊びを中心とした保育を行う上で解放型の園舎が望まれます。



▲図B

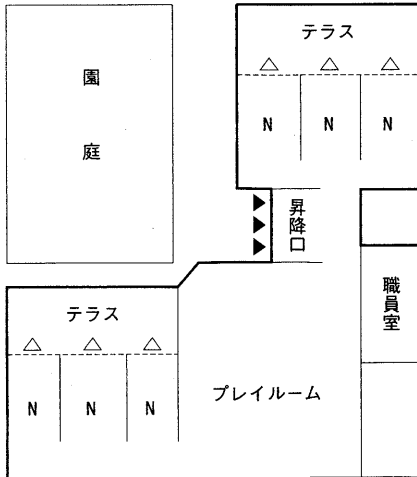


▲図A

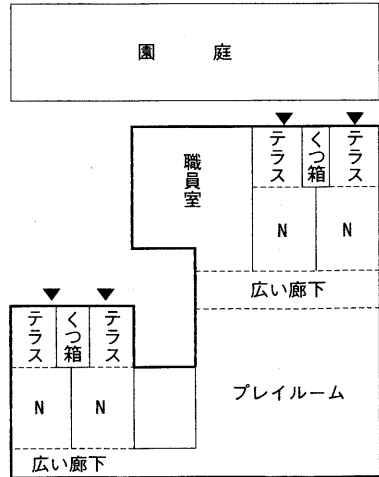
N 保育室

----- 引き戸で開口部分
 ~~~~~ フェンス

▲ ▲ 幼児の出入口  
 △ △ 園庭ばき  
 ■ 砂場



▲図D



▲図C

## ◇保育室に昇降口をつける

昇降口の在り方は、幼稚園の設計上大切なポイントです。玄関は大人から見ればただの出入り口でも、幼児にとっては心理的に敷居の高い所なのです。入園当初登園をしぶる幼児が、門は入ってくるけれども玄関で動かなくなることはよくあることです。幼児にとって家から身に付けてきた靴を脱いで、別の上履きに履き替えることは、気持ちの上でとても抵抗のあることなのです。その上靴の脱ぎ履きは、幼い子どもには簡単なことではないのです。右や左の区別もつきにくいし、足にびったりの靴はスポツとは入らないのです。床におしりをつけて座り込んで上履きをけんめいに履いている姿をよく見かけます。大きな昇降口で、大勢の幼児が混み合ってしまうような状況にはしたくないと思います。

昇降口の問題は、一日の出逢いをどのように持つかという点でもあります。昇降口が各クラスについていれば、クラス担任が直接出迎えて「○○ちゃんおはよう」と声をかけることができます。幼児にとって担任に出迎

えてもらえることはうれしいことです。

保育室の園庭側にくつ箱があることは、庭への出入りも自由になり、保育者はクラスを見ながら、外の幼児の動きを把握することができますし、必要に応じて外の幼児の所に駆けつけることもできます。

問題点は保育室の外のテラスにくつ箱を置くと、様々な工夫はして見るのですが、雨の日の吹き込みが防ぎにくいことや、砂が保育室に上がりやすい等です。管理上の問題はともかく心の安定や動きやすさ、安全などから、保育室に昇降口がついていることは良い面が多いように思います。

外国の幼稚園で羨ましいと思うのはくつの履き替えがないことです。生活の中に課題が一つ少ないのです。もともと衛生上、生活文化の違いから土足は日本の幼稚園に馴染まないのですが、土足の幼稚園があったら幼児にも教師にもストレスが減るかも知れません。上履きで外に出てしかられたり、注意を受ける幼児の数は非常に多いのです。

くつの履き替えは、中庭や、裏庭のある園の構造によつてはもう一足外履きがあり、煩雑きわまりないので、一人で三足、六個もくつがあることは、失くしたり、まちがったり、脱ぎ捨てて歩いたり、くつの問題は幼児にも先生にも負担なのです。

#### ◇テラスと廊下と保育室

幼児の生活の場として、三メートルはある廊下と保育室と上履きのまま出られるテラス、そして園庭の四つの性質の異なるスペースがあることが望ましいと思えます。(図C)

広い廊下は通路としての意味もありますが、長い空間が、保育室ではできない遊びを可能にします。クラスの戸を開いてしまえば保育室の延長となり、また、他のクラスとの交流の場ともなります。雨の日や冬などには、この廊下+保育室の空間はとても有効的なものと思えます。

テラスは上履きで出られる外であり、水浸しにできる

室内なのです。この清々とした空間は、縄飛びをしたり、ごぎをしいてまごをしたり、夏には色水遊びやフィンガーペイント、ザリガニの飼育や鉢植えのミニトマト栽培と園生活に欠かすことのできない空間です。水道や足洗い場の設備と共に三メートルはあるゆったりしたテラスが欲しいものです。

保育室は明るく適度の広さがあれば特段めずらしい形や窪みが欲しいというわけではないのです。以前見学した園は、かわいらしい夢のような幼稚園でした。保育室は六角形の大変こった作りでしたが、ロッカーが置けない、教材の収納ができないと先生方が悩んでおられました。

作りは素材でも、戸口が廊下やテラスに向かって全開するとか、あるいは窓の高さを低めにして、幼児に圧迫感を与えないとか、明るさや風通しがよい、収納しやすいなどの方が大切なのです。

保育室の作りは可動式のロッカーがあれば担任が作り変えることができます。かくれたスペースでも、パ

ズルなどをする静かなコーナーもロッカーや衝立で間仕切りすることができます。

### ◇プレイルーム

プレイルームは体育館と集会場、式場などの役割を持った空間です。プレイルームの活用状況は保育室との距離によってかなり異なるように思われます。

保育室が近く教師が常に通る園(図C)では幼児は常にプレイルームを遊びの場所として活用していますが、遠く離れている場合(図B)教師の目が届かないので、担任が幼児だけでは出したがらないことや、年少児の場合は幼児自身が不安で出られないこともあり、あまり活用されていませんでした。折角の広い空間が活用されずにあることは残念なことです。保育室と違い、給食だからといって片付ける必要のないプレイルームはもっと大形の積み木や、道具を持ち込んで保育の場にすればよいと思えますが、場所の問題は大きいと思われます。

### ◇使いこなせないオープンスペース

教育についての考え方にも時の主張があります。

平成元年に開園した図Dの園は隣接するオープンスペースと言われる小学校とセットになって建造されました。小学校は床は絨毯が張られ、教室の壁は可動式で、広くも狭くも仕切ることができると本格的なものです。幼稚園は木の床で、間仕切りは固定され、廊下側の扉がないのです。これはおそらく、新しい教育要領にさきがけて「これからの保育は幼児の主体性を大切にしたい、教師が何かをさせる保育ではなく幼児が環境に自ら関わって遊びを通して望ましい成長を助ける」といった主張のもとに作られたものと思われます。けれども一クラス三十名の幼児を一人の担任で保育することには変わりなく、オープンスペースというのが、具体的にどのような保育をする場なのか、恐らく設計する側も、使う側もイメージが持てなかったのではないかと思われます。

扉がないということは、妙に不安なものであり、また、音響面での不都合は大きいものであります。歌を

歌う時は、三クラスそろえないと、うるさくてかなわな  
いという滑稽なことになってしまいました。

保育のあり方を根本的に考え直さなければ古いやり方  
のままではオープンスペースは使いこなせません。

広い廊下を保育空間として取り込んだ考え方は良かつ  
たのですが、はたして廊下との間仕切りをなくすこと  
が、オープンスペースかどうかは疑問です。

幼児が安全かつ心豊かに過ごせる園舎の設計にはまだ  
まだ研究を要することのように思われます。

(茨城県公立幼稚園)

注1 昇降口については小山節子先生に啓発されました。

参考文献 『改訂幼稚園のつくり方と設置基準の解説』フ

レーベル館 一九六八



▲平成7年度に新築されたH幼稚園

# 引き際を上手に



吉岡 晶子

こどもたちが帰った後、静かになった保育室を片付けながら、その日の出来事を思い出して「また今日も中途半端なことをしてしまった」「あのけん

か、話は聞いたけど、どうもすつきりしなかった」「あのけんか、話は聞いたけど、どうもすつきりしなかった」

「あの件は結局どうなったのかしら」など反省することが次々に浮かび、私はいつもこうなんだから、忙しさについ中途半端なかかわりをしてしまうんだから、と自分のいたらなさを思うことがよくあります。反省すればいいというものでもないのに。

そんな私をホッとさせてくれる、肩がちよっと軽くなる出来事がありました。

「ウェーン、ウェーン」とままごとコーナーから泣き声が聞こえます。A子が両手で顔を覆いさめざめと泣いているのですが、近くにいてままごとをしているB子、C子、D子は、「どうしたの?」「泣かないで」でもなく自分の動きをしています。実は、A子は自分のいやだ、違う、という気持ちを「泣く」

という行為で意志表示することが殆どなので、また泣いた、と思ったのかも知れません。そうではあっても顔をおおう指の間からチラッチラッと私に訴える視線を投げかけてくるのですから、私はままごとの所に行きました。A子は「あのね、私ね、おねえさんがいいのにならしてくれないの」「そうなの、それで悲しかったの」と私が相づちを打つと、すかさずお料理をしていたB子は、「だってね、もうおねえさんは二人もいるの」と手を休めずに言います。A子が泣いていても知らん振りをしたのではなく、やはり気になっていたのでしょう。「そうなの、二人いるともうだめなの?」と聞くと、B子は



「うん、あと赤ちゃんなの」とお料理を続けながら言うのです。A子はまだメッメッしています。「おねえさんはもう二人もいるからあと赤ちゃんなんだって」と伝えると、A子は「でもおねえさんがいい」とまたウェーンと泣き始めました。ままごとでよく起こるトラブルです。私が行ってからはA子とB子はまともに顔を見合わせてはいません。私は、「そうなの」「こうなんだって」と間を取り持ちながら、赤ちゃん役が多いA子の気持ちを考えてB子になんとかならないか考えてもらおうか、B子のはっきりした態度にも何かあるのだろうしなどと頭の中で考えつつも、そこでは「どうしようねえ」としか言えませんでした。そうこうしているうちに私が誰かに呼ばれたのでしょうか（今となっては定かではないのが恥ずかしいところです）、その場を離れてしまいました。

少し経って保育室にもどり、ふとままごとコーナーを見ると、A子もB子もにこにこしてとても楽

しそうに遊んでいるではありませんか。「あら、良かった」「大丈夫だったのね。何とかなったんだ」とホッとしました。

このことをあとで考えてみて、私が途中でいなくなったことが、かえって息が止まってしまった二人の関係を切り替えて、新しい展開へと向かわせたのではないかと思っただけです。二人共、言いたいことには先生に伝えたいし、遊びは続けたいし、何とかならないか……と思いはじめた頃で、タイミングが良かったのでしょうか。私がいまごろコーナーに行った時に、A子は先生が来てくれたと思ひ、B子は先生が来てしまったと思っただけかも知れません。相手に泣かれると立場が弱くなりますから。トラブルが起きた時、「先生が来る」ということは、あるメンバーにとっては強気になれることであり、あるメンバーにとっては弱気になってしまうこともあります。言いたいことが言えるようになったり、言いづらくなってしまうこともあるでしょう。いくら優しく穏やか

にしても「先生」の存在は大きく影響は大であることは否めません。

この時、私が双方の気持ちを聞いて何らかの解決に導いていたとしたら、それはそれで、治まったかも知れません。でもその場合には、先生に助けを求めたA子は、「先生が来て助けてくれた」という思いが残り、A子と私の間ではプラスの関係になるでしょう。B子はもしかしたら「A子ちゃんはいつも泣いちゃうし、先生がこう言ったから」という思いが残らないとも限りません。次に事が起きた時に、「さっき先生がそう言ってたじゃないの」ともなりかねません。たまたま私が「どうしようねえ」とだけ言い残し、二人に下駄を預けることになったこと





で、双方のやりとりがあつて解決し、二人の間では新しい道が開けたのではないでしょうか。結果として子どもたちに任せる部分があつたことで育ち合いにプラスになった気がします。

いつもああすれば良かったこうすれば良かったと反省の材料になる小さな出来事で、こんなことを思い巡らしました。

自分のかかわり方で、中途半端だったと反省することはあつても、「引き際」と意識したことはあまり無かつた気がします。この事例から考えるに、あるところまでかかわり、あとは子どもたちに任せることがあつても良いのではないか、むしろその方が



子どもたち同士の育ち合いに繋がるのではないかと思います。突き放すのではなく、考えたり悩んだり工夫したりする余裕を残したかかわりということですね。勿論最後まできちんとかかわることが必要な場合もありますし、入園してすぐというのでもなく、子どもたちの育ちに合わせて少しずつかかわり方を変化させていくということでしょう。任せた後は、日頃の先生のかかわり方、判断の仕方や動き方が表われることになり、自分を振りかえるチャンスになるかも知れません。

あるところで引いて任せることが中途半端の言い分けにならないようにし、ややもすると考えすぎて不自然になりがちな私、意識しすぎないように気をつけて、「引き際を上手に」をモットーに、育ちに繋がる引き際を模索してみます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ある日の育児日記から (60) 佐藤 和代

来年、圭は小学生になります。そろそろ小学校までの道を教えようと、散歩がてら学校へ行ってみることにしました。

圭は大はりきりで、「道、知ってるよ!」と私を先導。通りを渡り、路地を左に曲がり、広い道へ:あれれ? 「圭、そっちは行き止まりよ!」「ちがうの、いいの!」圭はにんまり笑って、空き家の庭にどんどん入って行きます。へいにつきあたると、へいの端の、有刺鉄線のすきまをねらってよじのぼり:こらこら! 「だって、近道なんだよここ!」私は有と一緒に回り道。へいの反対側に着

くと、今度は駐車を横切り、神社をぬけ、私道に入ります。やれやれ、誰に教えてもらったの? 圭はすました顔で、「R

くん」。なるほど、近所の二年生の男の子かあ。それにしても、まだこの辺にも、こんな道があるのね。私も小さい頃、近所の路地や抜け道に精通していたっけ。初めての道にふみこむドキドキワクワク、意外な所に出たときの驚き。自分だけの秘密の通路。あんな楽しい気分を、圭も知り始めたのね。

いつとき、私も子どもの頃にタイムスリップ。幸せ気分ひたって、さて、と気を取り直すのです。圭、ちゃんとした通学路も覚えましようね!



# 『十里霧中』

—— 息子たちのイギリス公立校体験記(2) ——

豊田 一秀

幼稚園の教師をやめた私は、四十半ばにして妻と十四歳と十二歳の二人の息子を連れてイギリスで学生生活を始めている。前回、十月号では息子たちの学校探しから入学許可証が日本に届いたところまでを述べたので、今回は渡英後の生活と新学期の様子等について話してみたい。

八月二日に渡英した私達は、決めておいた借り家に四日に入った。入居時にイベントリーチェックと

いう、備え付けの備品等のチェックが何と二時間に渡ってあって、皿の一枚、窓ガラスの汚れ具合までも確認書に記入されていく。腕白な二人の息子と、そそっかしい妻を思い、少々気が重くなる私であった。まあ、私とて人のことを言えた義理ではないが……。この家はグレイトブックカム (GREAT BOOKHAM) という小さな町にあって、ロンドンから電車で南に五十分程の所である。ここまで来る

と辺りはもう全くの田園地帯となり、この借り家の前も地平線まで広がる麦畑である。

少し落ち着いてから夫婦で学校に挨拶に行った。

学校までは四キロ弱であろうか、道沿いに前庭の広い住宅地や畑が続ぎ、森の中に教会が見える。この景色の中を子どもたちが、毎日自転車を通うことになるのだ。休み中の学校はひっそりとしていて、それでいて子どもの匂いは残っていて、何とはなく虚ろな感じがする。どこの国でも休み中の学校は同じ雰囲気だ。九月の新学期にはこの廊下も子どもたちの歓声にあふれるのだろう、等と一人感じながら事務室に入る。日直の先生に挨拶をした後、新入生のリストに息子たちの名前があることを確認してまずは安心する。二人共、一学年遅らせて欲しいとお願いしておいたのだが、次男の方は籍にゆとりがなく、年齢通りのクラスになるとのことであった。日本では中学一年と中学三年の二人であったが、こちらでは七年生から十一年生まで五学年ある中の八年

生と九年生に編入することになった。入学式のことや、九月までに用意しておくもの等、伺いたいことは山ほどあったが新学期の四日前にもう一度来なさい、その時に校長や担任に紹介しますから話はそこで、ということであったのでその日はすぐに帰ってきた。もっとも渡されていた学校案内に制服をどこで売っているかなどが書かれてあったので、休み中に揃えておくことにする。因みに男子の制服は胸にワッペンの付いた黒のスーツで、ネクタイはクラスによって色の異なるストライプである。女子は同じ黒のブレザーにグレーのミニスカートとなる。

新学期まで、ほぼ一か月の夏休みがあるわけだが、この日々をできるだけのんびりと過ごそうと妻と話す。休み中、イギリスやヨーロッパを旅行することもなく、かと言って九月に備えて英語の特訓をすることもしなかった。「その時に困ればよいことは、その時に困ればよい」と考えていた私たちは、せいぜい近くの町に行って日常のものを揃えたり、

辺りを散歩したりして過ごした。言葉さえよくは通じない、見ず知らずの土地に暮らし始めるのである。家族四人がそれぞれに新しい環境を、「自分の内なるモノ」と思えるようになるのには、各人がこのような「自分の意思で過ごせる時間」を持つことが大切に思われた。それでも銀行、家庭医の登録、車の購入など親は結構忙しかったが、赴任の日から仕事が始まる、企業から派遣されてきた人たちに比べれば格段に恵まれていたと思う。

子どもたちは以前よりも仲良く遊ぶようになり、健康であった。時に少し退屈そうにも見えたが、そんな時は、ひとり、自分の小さい頃の写真やビデオを見たり、学校の卒業アルバムを引っ張り出して来たりしていた。過去の中に「確かさ」を確認しようとする作業のように私には見えた。

新学期の二日前、九月二日に四人で学校に挨拶に行く。子どもたちは、この日初めて校舎内に入った。校舎はレンガ造りの一部二階建て、継ぎ足しを

重ねたタコ足のような建物は日本の公立校と比較して決して立派とは言えない。プレハブの部分もあり、生徒の増加に校舎が追い付いていないのは明らかだろう。ただし、校庭は芝生でその周りは森である。ケンブリッジ出の校長先生は相変わらず穏やかに我々を迎えてくださる。先生曰く、この学校に日本人が入学するのは初めてだそうである。息子たちは約千三百人の生徒の中で唯一の、そして初めての日本人となるわけである。校長先生に挨拶をした後、学年主任を紹介され、クラス名や担任、ホームルーム等を教えられる。子どもたちはほとんど無口であった。緊張しているからだとは分るものの、相手を無視しているからだとはいえない。長男等だと、私は先方の印象が気になってしまう。長男の担任はロマックス先生という美術の若いハンサムな先生で、次男の担任はハーセイ先生という既婚の若いフランス語の先生であった。先生方には、二人はまだほとんど英語を解せないの、大切な連絡は

メモに書いて渡して欲しいとお願いする。

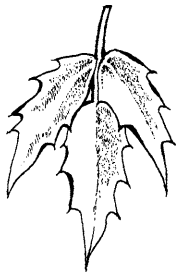
九月六日、いよいよ新学期の始まりである。九時の始業に間に合うように、余裕を見て八時過ぎに二人して自転車で出て行く。親は来なくてよいというので、妻と二人、玄関で見送る。二台の自転車の後ろ姿を目で追いつつ、一日が無事に過ぎるよう祈る私であった。妻も横で同じような気持ちで自転車を見送っていることが痛いように感じられた。午後四時過ぎに二人、自転車で無事に帰ってくる。長い一日であった。

あまり多くを語らない息子たちであるが、長男の話では、日本の入学式のようなものは全くなくて、クラスに行った後すぐに授業があったこと、授業の中の一つは最初から最後まで何の課題かさえ分からなかったこと、昼は食堂で何とか食べられたとのことであった。食べることが一番大切なことから、初日から食べられるとは大したものだと私は替りおいておいた。次男は昼食のときに、持って行ったおにぎり

を出したところ、分けてくれと言われたので食べさせると、海苔を「べっべっ」とされたそうで、明日からはサンドウィッチにしてほしいとのことだった。

考えてみれば、二人とも小学校で少し英語の授業があったとはいふものの、長男は二年半、次男に至っては三か月しか英語を勉強していないのだ。さぞかしストレスの多い一日であったであろう。子どもたちに済まないような気がして私たちまで気が重くなってくる思いであった。唯、親がそう思うわりには二人が案外けろっとしているのが救いであった。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)



# 幼児の教育 第九十四卷 (平成七年) 総目録

ラオスの子どもたち

インタヴァン・チャントソン

## ◇三号

離に寄せて 附属幼稚園のお雛さまの

こと 小林すみ江

ある日 津守 真

『新しい人よ眼ざめよ』 大江健三郎

ふたたび 本田 和子

子育てにおける夫婦の連携(6) 夫婦お互

いが幸せに生きるために 飯長喜一郎

あそびの研究(5) モンゴルの子どもたち

の遊び 藤本浩之輔

ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代

私の子ども時代(6) 大陸で育った私

今井百里江子

“人”との関わり 大下 祥子

妹の誕生と入園準備 河合 聡子

## ◇四号

子供讃歌

卒業生たちと再開の日に 津守 真

これから 田代 和美

## ◇一号

ある日 ヤン君のこと 津守 真

あそびの研究(4) シルクロードの子ども

の遊び 藤本浩之輔

保育、遊び、散歩 加用 文男

松本のお正月「飴市」と「三九郎」

美谷島いく子

年のはじめに 岩上 節子

お正月さんがやってくる(2) はる・みつ

黄遵憲がとらえた明治の子ども(2)

首藤美香子

ある日の育児日記から(4) 佐藤 和代

子育てにおける夫婦の連携(5)

お父さんの子育て 田野 直

## ◇二号

子供讃歌

〈巻頭言〉実践の記録を考える

角尾 和子

大きくなったKくんと遊んだ日に

家庭科教育の男女共修をむかえて(5)

生活の変化と家庭科教員養成の課題

柳 昌子

特集〈こだわる〉

こだわりと情緒 藤原 正彦

小さなものへの視線 森下みさ子

こだわりにこだわる 田中三保子

『平家物語』にみえる一つの話

めぐって 山添 昌子

子どものこだわりと保育 大橋利恵子

こだわらないことへのこだわり

日々の保育の狭間で 中村 憲治

子どもたちへのまなざし(11) フックト

オン クラシックミュージック

ある日の育児日記から(6)

松井 とし

佐藤 和代

イギリスからの春の便り 笹川真理子

トボスにおける発達 第一回 無藤 隆

幼児の自己を支えるには 藤崎眞知代

園長室の窓から(1) 消耗教材を考える

ある日の育児日記から(62) 原口 純子

子どもたちへのまなざし(12) 佐藤 和代

研究発表会 松井 とし

中国のむかしばなし 『なまけもののおかみさん』 近藤伊津子・編

B男のこと 上坂元絵里

◇五号

子供讃歌

〈巻頭言〉保育における根本考察と

現実化(如是我聞) 河邊 泉

人間を尊敬することが文化の基礎である

津守 真

動物行動の研究から(1) 動物たちとの

対話 柴坂 寿子

子どもたちとの生活のなかで大木千佳子

にわたり小屋でのひととき 椎名 裕子

お母さんのサンタ大作戦 宮里 和則

保育実践のバイオニア——氏原録(1)

「言葉」が幼児理解の壁になるとき 守隨 香

ある日の育児日記から(63) 入江 礼子

私の子ども時代(7) よく遊び、よく学び 佐藤 和代

子供讃歌 鈴木 孝

◇六号

状況の中に埋没しているだけだったら保

育者の自我の成長はない 津守 真

子どもと共に生きる 阿部 なを

坂元彦太郎先生 追悼

岡山での坂元先生 秋山 和夫

坂元彦太郎先生を偲んで 村山 英子

坂元彦太郎先生を偲んで 立川多恵子

思い出のひとつま 村田 修子

トボスにおける発達 第二回 無藤 隆

園長室の窓から(2) 保育環境について

考える(1) 原口 純子

子どもたちへのまなざし(13) 話すこと・

聞くこと 松井 とし

保育実践のバイオニア——氏原録(2)

ある日の育児日記から(64) 守隨 香

呼応しあう関係をめざして 伊集院理子

◇七号

子供讃歌

第21回 O M E P 世界大会を目前にして

倉橋惣三の保育論に関する一考察 津守 真

動物行動の研究から(2) イルカとの

出会い 柴坂寿子・則竹詳子

夏の夜話 近藤 雅之

音楽リズム・オン・ステージに参加して

ある日の育児日記から(65) 小崎 祥子

O M E P (世界幼児保育・教育機構)

世界大会開催にむけて 冨中 徳子

幼児教育から見たリトミック高松弥生子

私の子ども時代(8) 昭和の初めの頃の

幼児の過ぎし日を振り返り 陳 繡



◇八号

子供讃歌

〈巻頭言〉『キンダーブック』のこと

森下はるみ

スペインに旅して OMEP世界大会の

直前 津守 真

トボスにおける発達 第三回 身体から

意味へ 無藤 隆

園長室の窓から(3) 保育環境について

考える(2) 原口 純子

特集〈緑蔭図書紹介〉

阪神大震災と大江健三郎講演

「癒される者」 中村 弓子

『ナルニア国ものがたり』全七巻

森上 史朗

『心に残る言葉』Words to Remember

村田 修子

アダンの木陰に残光を観る

『田中一村作品集』 本田 和子

子どもがすすめる本

『動物行動学入門』他 湯沢 朱美

子どもたちへのまなざし(14)

もう一度体験 水野 悌一  
聴いて 松井 とし

親子発達とノート法

ある日の育児日記から(56)

子どもと共にいて

◇九号

子供讃歌

岡村 佳子

佐藤 和代

斎藤 美和

〈巻頭言〉人間主義の幼児教育 河野 重男

不確かな未来を前に 津守 真

震災後の子どもたち(1) 阪神大震災を体験した子どもたちを  
見つめる中で考えること 田代 和美

特集〈災害と子ども〉

淡路・阪神大震災 父の場合 前田 陽子

思い出すこと 清水 光子

災害と想像力 「鯨絵」の向う側で

戦争という「災害」 森下みさ子

子どもに育てられる 小川 剛

ある日の育児日記から(57) 丹野 禧子

動物行動の研究から(3) 森は生きている 佐藤 和代

ここから先は子ども席 小山 幸子

近ごろ思うこと(1)

永野むつみ

マレーシアの子ども達をめぐって

藤長かおる

◇十号

〈巻頭言〉「教育」過剰の教育不在

忙中の読書「ソーシャルロールパロリ 小川 博久

ゼーション入門」を読む 津守 真

保育学文献賞を受賞して

「障害」のある息子との日々を楽しむ

研究はやつと始まったばかり 徳田 茂

園長室の窓から(4) 保育環境について

考える(3) 飼育動物 丸山 尚子

トボスにおける発達 第四回 身体知の

成り立ち 無藤 隆

ある日の育児日記から(58) 佐藤 和代

『十里霧中』 息子たちのイギリス公立

校体験記(1) 豊田 一秀

鏡の世界の子どもたち 左利きの幼児の

保育をめぐって 齋藤 薫

子どもたちへのまなざし(15)

おばあさんうさぎのこと 松井 とし  
二つの保育形態を体験して 一保育者  
として思うこと 高橋 陽子

◇十一号

第48回日本保育学会講演から 対談  
「今、人間を育てる」(津守 真・堀合文字  
司会 秋山和夫) 報告者 友定 啓子  
震災後の子どもたち(2)  
それでも元気だよ! 稲岡 康好  
保育を裏付けるものを考える(1) 米国の  
幼児教育に光をあてて 森 眞理  
動物行動の研究から(4) カラスに寄せて  
小山 幸子  
どこの組のせんせい? 榊田 正子  
私の子ども時代(9) 沖繩農村の暮らし  
眞榮田ツル  
ここから先は子ども席 観劇会周辺  
永野むつみ  
ある日の育児日記から(9) 佐藤 和代  
我が子らの集団生活をめぐって  
小蘭江幸子

◇十二号

〈巻頭言〉「保育を楽しむ」ことを

OME P世界大会を終えて 津守 真  
保育の日常を問う 環境としての自然と  
どう向きあうか 新井 孝昭  
保育を裏付けるものを考える(2) 米国の  
実践例から学ぶこと 森 眞理  
震災後の子どもたち(3) 『震度1、  
震度2、震度3…』 南 佑子  
トボスにおける発達 第五回 声と言葉  
無藤 隆  
子どもたちへのまなざし(10) ノンヴァー  
バルコミュニケーション 松井 とし  
園長室の窓から(5) 保育環境について  
考える(4) 園舎 原口 純子  
引き際を上手に 吉岡 晶子  
ある日の育児日記から(6) 佐藤 和代  
『十里霧中』 息子たちのイギリス公立  
校体験記(2) 豊田 一秀  
第九十四巻総目録

幼児の教育

第九十四巻 第十二号

(一九九五年十二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年十二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二一―一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込 六一―四一九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替 〇〇―一九〇―二一―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

# フレーベル新書

どこに持って歩いても読めるような新書判の保育図書です。理論的な書から、すぐ使える実践書まで幅広いシリーズです。

## 幼稚園真諦

倉橋惣三 著  
B6変形判 136頁 定価650円(本体631円)



永年築き上げてきた著者の教育論の書です。単なる理論的組立や基礎づけだけに終始せず、実際に即した保育法、保育案等を述べた理論の書。

## 子供讃歌

倉橋惣三 著  
B6変形判 188頁 定価830円(本体806円)



わが国の幼児教育の基礎理論を確立した著者が、この道に入った時から晩年までを語った自伝的物語です。保育者に保育の指針を示してくれる書。

## 育ての心(上)

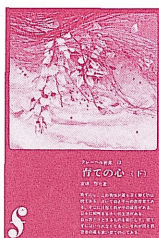
倉橋惣三 著  
B6変形判 176頁 定価830円(本体806円)



心から子どもを愛して幼児教育の基礎を築いた著者が折にふれて書いた随想や小論をまとめた書です。いろいろな芸術や文化財など幅広い内容になっている。

## 育ての心(下)

倉橋惣三 著  
B6変形判 232頁 定価850円(本体825円)



育ての心(上)に続く続編です。単なる保育集団のことだけでなく、幅広い教養や思想に思いめぐらし、幼児の真の姿をとらえている。

## 倉橋惣三・その人と思想

坂元彦太郎 著  
B6変形判 184頁 定価750円(本体728円)



わが国の幼児教育において理論と実践の輝かしい先駆者である倉橋惣三先生の生涯と思想をわかりやすく、しかも現在でも生きている精神を紹介した書。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 保育者研修シリーズ

- 園内研修資料として最適
- 保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも好適。

日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

## ① 子ども理解のポイント

柴崎正行＋今井和子 編著

B5判・128頁・定価2,000円(本体1,942円)



保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の理解、関係の理解などに視点を当て、ベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。

## ② 生活と計画のポイント

柴崎正行＋川合貞子 編著

B5判・136頁・定価2,000円(本体1,942円)

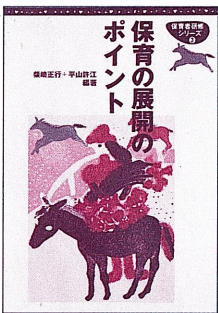


保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育課程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画づくりを解説したのも。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。

## ③ 保育の展開のポイント

柴崎正行＋平山許江 編著

B5判・168頁・定価2,000円(本体1,942円)



保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。

## ④ 地域との連携のポイント

柴崎正行＋小田 豊 編著

B5判・144頁・定価2,000円(本体1,942円)



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。

キンダーブックの  
**フレーベル館**